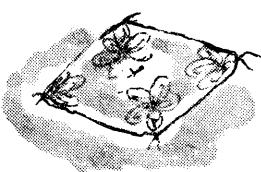


幼稚園誕生百年を迎えて思うこと

山村 よ



五十三年前をふり返って

昔の女学校を卒業してすぐ、私は幼稚園の世界にとびこんだ。

故倉橋先生のご郷里で、先生の教えをうけられたあとを幼児教育一筋に子どもとともに組んでおられた静岡の桜花幼稚園、林敦子先生のもとで、夢中で三年間を過ごした私は、何も知らないままに青春時代を子どもと遊んだことが非常に印象深く、今でもあの藤棚一ぱいにさがったうす紫の藤色が、子どもたちの姿と一つになつて、はつきりと目に浮ぶ。(今でも私の大好きな色)

夢中になって遊んでいる中でも次々におこる毎日の生活の中で疑問は非常に多かった。しかし指図通りに、きちんと翌日の準

備をした。六色のむぎわらにぬるま湯を通してきれいにあきとり、一寸ずつに物さしではかって切り、めいめいの箱に何本かずつにわけたり、子どもの作品をきれいに仕上げたり、明日の準備と今日の整理、お掃除などに追われていた毎日の生活は、あちこちに見られる今の幼稚園の多忙な生活とあまり変わりなかつたが、毎日は楽しくて楽しくて……時々、これでいいのかしら? と思いつながらも、先輩にききただすことばもわからず、まごまごしていると林先生が簡単に解決してください、安心して皆さんと雑談にふけつていいたあのころがなつかしい。話し合いの中味は必ず子どものこと、保護者とのやりとり、はては恋愛論までとび出でて帰宅時間はいつも夕方、ときには帰宅がおそいと父親にせい

ぶん叱られた時もあった。こんなことは、ほんとうに今も昔も少しも変わっていない幼稚園風景だ。

しかし常に私の頭の中にこびりついていた事は「私は子守じゃない」「子どもたちは小さいけれどやればひとりでできることがいっぱいある」「これでいいのか?……もうと勉強したい」など、こうした気持ちを林先生を通して故宇式かん先生に話し、許可をいただいて静岡県からの推せんをうけて入学したのがお茶の水女子高等師範学校保育実習科だった。

その前年九月の大震災で全焼した校舎は、バラック建でそまつな所、今でも暗い中廊下が思い出される。でも毎日の学生生活のたのしさ、のびやかな十八名の学生の年齢はまちまち……私は三番目の年長者だった。

入学当時は倉橋先生の偉大さなどは全然わからず、ただ林先生からうかがっていた「すばらしい先生」のイメージはびつたりで、お話をおもしろく授業をうける午前中はほんとうに希望にあふれていた。どんなことを教えていただくのか? 期待は大きかつたが、やっぱり私の記憶の中には当時の先生は三、四人しか残っていない。それが、机の上だけの勉強はほとんど忘れ、生物の時間のようにいつも外に出ての勉強で、一学期に一、二回のお講義の他は井の頭公園に四季の観察、秋などは二回も虫の音

をさきに行つた。江の島、日光、三浦岬などで生きた勉強がとても楽しかった。

倉橋先生のお話はおもしろくて……一時間ばかりは「あつ!」と思う間に過ぎてしまう。ノートはいつも白紙、今になつて思えば、先生の著書『幼稚園雑草』に目次となつて書かれていることがみんな私たちの講義の内容だったかもしれない。とにかく「雨の日」「一人の尊嚴^{そげん}」などは今だに私の頭にはつきり残つてゐる。あの黒い背広姿のハンサムなお姿は五十年たつてもまだ私の頭の中にやきついている。

そしてこのことは今、私が常に学生に話していることばを生み出している。

○ひとりひとりを大切に、一日一日を悔いのないように。

○子どもが自発性を起こさないのは、「先生」がおおいからさつてしまふからだ。

○「自己充実」「子どもと共に」「子どものうしろにさがつて」「生きのよい生活ぶりをのぞかせなさい、まねさせなさい」……「生活を、生活で、生活へ」など……

そうした授業を終つて、おおいそぎで幼稚園に帰り夢中で子どもたちと遊んだ。

最も印象に残っていることは和服姿の私たちが一組に三人、たすきがけで子どもたちのお弁当を食べたあと片づけをすることだった。たまに授業がおくれて帰ると、新庄先生がたすきがけでお掃除をしておられるのでびっくり、腰をかがめてまじめに「あやまり」すぐほうきを取りあげてお掃除にかかる……こんな姿は今的学生には望めない……ナンセンスなことだらうか？

あのころからもう五十年以上もたつて、今年で日本の幼稚園も百年目の誕生を迎えるという時、今、その半世紀を幼稚園の中で過ごしてきた私にはいろいろなことが走馬燈のようにめぐり始めている。長いようで短かつた半世紀を、ほんとうに幼児と共に過ごすことを生きがいとして、夢中で過ごした戦前の幼稚園生活がなつかしい。

その生活も公私共々大きな大きな波にもまれて、一時期は長野県の山の中に逃げた私も、農村での人間味あふれる素朴な生活と「変りない子どもの姿」にはげまされて再出発をしたおかげで今まで幼児教育ととりくむことができたのだ……と感無量のものがある。

倉橋先生と私、誘導保育

一年しかご指導をうけなかつた私も、当時はお講義が楽しいだ

けで、その理論がお茶の水幼稚園のどこに生かされているのか？全く考えもしなかつた。先生のお世話で当時幕張に開園された千葉県女子師範学校附属農村幼稚園の保母になつてから、私は思う存分、誰に遠慮もなく保育に専念した。今は亡き土屋まさこさん（日の出幼稚園主事）と二人で夢中になつて子どもたちと遊んだ。しかも午前中はお互いに二年生を担任し、お昼食もそそそこ農村の子どもたちを迎えて午後三時まで庭で、山で、電車ごっこやままと遊びに興じた。

農村幼稚園を二ヵ年で終わり附属幼稚園の本園に帰つてからがまた、楽しい園生活で八年間を一年保育児だけ専門に相手をつとめた。その間一ヵ月に二、三回は倉橋先生のもとに馳せ参じてじかにいろいろと助言をいただいた。誘導保育についても先生の理論を実際の現場にうつして実践し、いろいろな記録もとつたのに……何一つ残つていらないとは？

一身上の都合で昭和十一年に東京に出向を命ぜられた私は、麹町区の富士見幼稚園でもっぱら誘導保育の実践を試みた。ちょうど十三年秋に全国的に大きな研究発表をなさつた富士見小学校の附属幼稚園ということで（小学校は生活カリキュラムの実践発表）私も発表の仲間に入つた。記念講演は倉橋先生、私はおこがましくも倉橋先生の前で誘導保育案のテーマについて発表した時

のことがまあまあと思は出される。

倉橋先生の保育理念が、いつも「子どもの生活から生れたもの」ということで、折から靖國神社のお祭をテーマに実際保育を公開したことにつづき、時々子どもの発想から生れたあそびで、興味を誘導しながら一ヶ月に二つ位の「あそびのまとまり」を考えて誘導し発展させて行った。あのころが私にとって最も生きがいのある時代でこれは五、六年続いた。

そのころはお茶の水幼稚園でも誘導保育が盛んに行われた時代で、菊池先生、徳久先生などが大きな汽車などを庭につくって子どもたちと遊んでいる写真は、当時の幼児教育雑誌を賑わしていった。

「自由保育」ということば

倉橋先生の講演の中では「自由保育」ということばは出てこなかつた。いつごろから使われ出したかはつきりした記憶はないが……倉橋先生のお話をうかがっていた人たちは「子どもの自由な活動を尊重しなければ正しい保育者ではない」、子どもの自由なあそびをたちきつてこまぎれにしてはいけない。先生の計画はなければいけないけれど、そのために子どもの生活を「こまぎれにしてはならない」ということが徹底したのか、また一方ではお茶

の水の幼稚園は自由な保育形態をとっているから「まねしなくては……」などなど、正しい幼児教育の姿勢をもととする人たちがだんだんと「自由保育」ということばを口にし、自分たちの「保育形態を反省し出したころ」、毎年開かれるお茶の水の講習会で「一日の生活の流れ」と題された倉橋先生のお話が二、三回づいたことがあったので、私たちお茶の水の卒業生はもっぱら「自由な子どもの活動をおさえぬよう」と心がけた。そのためにずいぶん異端視された私たちの中には倉橋先生のお話をきいて育った卒業生だのに、「自由保育はできない、放任に流れてしまう」といつてそっぽをむいていた人たちも何人かいた。

このころには倉橋先生の「わる口」をいう人もでてきて（ロマンチスト、八方美人など）私などくやしくてくやしくて……そして一齊保育でかたまつてしまつた先生方と、どこまでも倉橋先生の保育理念を通そうとする人たちが対立した時もあったようだ。とくに国民学校になつた昭和十四年～十八年ごろまでは倉橋先生も自論をそのままお出しになれないでずいぶんお困りになつていたようにうかがえた。（これは私だけの見方かも知れないが……）

戦後の混とんとした時代

二十五、六年ごろには雨後のたけのこのように毎月十一十五園位が誕生し（東京の私立幼稚園）中には幼児教育には何のゆかりももない「おじさんおばさん」を園長先生とよばねばならない時代があった。無資格の先生方も多く、子どもを自由にあそばせるなどとは考えようともしなかつた。また、あそばせることよりも何かを教えて教育している姿が見えないと、園長先生も保母さんも「安心できない」という時代には、こま切れ的に保育項目をならべて一斉保育をする方が「らくだ」ということでだんだんと一斉保育に固定し、日課的作業がつづけられたりして型にはまつた幼稚園風景があちこちに見受けられた。

こうしたことに反発した私などは、当時文京区立第一幼稚園長として勤務していたので、もっぱら「自由保育」「自由保育はわが園から」などと看板をかかげて、子どもたちと楽しく遊んでいたものだ。

当時復活した東京市の保育会のお世話役をいただいた私は、いろいろな研究場面を見せていただいたら、研究熱心な先生方と夢中になつて「自由保育とは」「自由保育と放任」などのテーマをかかげて現場の先生方と討論会をもつたりしたが……それからし

ばらくは「自由保育は新しいよい保育のあり方で一斉保育はわるい保育？」というような極端なことをいう人たちも出てきて、私なども自己満足におちいったりしていた時代が相当ながくつづいた。

今、静かに考えて見れば、こうした保育形態は二の次のことで、大切なことは「正しい保育理念をもつ」ことを忘れていた人たちが多かつたのではないだろうか？

公立幼稚園と教育要領の通達

私立幼稚園が雨後のたけのこのように増加すると同時に、文部省の振興五ヵ年計画は各地に公立幼稚園をつくった。そしてたくさんの兼任園長先生が誕生した。幼稚園教育発展ということでは大変喜ばしいことで、私など有頂天になつて喜んだが、小学校教育をものさしにした兼任園長先生の中には、幼稚園教育を小学校の小型のものに固定させたり、中には全部主任さんまかせで、幼稚教育の理念を理解しようとせず、わからぬままに各市町村の教育委員会指導部にその指導を依頼するところもたくさんでてきた。

こんな時に、文部省では「幼稚園教育要領」を通達して一斉に幼稚園教育に光を与えてくださったのに、それを「受けとめる保

育者は？」それぞれの立場で、自分勝手にうけとめて、六領域を八

教科と同じように考えたり、幼稚園も「学校だ」とか？ いわれ

る方々もあって、脚光をあびたように喜んでいた私も、倉橋先生の保育理念とはちがった方向に流され、そうになつて、ずいぶん考えさせられた。

教育要領の中味が、保育を教育に、その方法を学習、指導といふことばにおきかえたために、そのことばに左右されて、今までのゆるやかな子どもの生活を「集団」にまとめ集団指導の研究をしてようとする傾向になつてしまい、公立幼稚園の研究活動は「指導計画」「ねらい」「導入」「評価」など、固苦しい考え方ひきずられてゆき、保育形態まで変わつていったよう思う。

その後各都道府県市町村では「先導的試行」の先どりをしようとしてか？ 「幼小一貫性あるカリキュラムの作成」とか「幼小関連授業」など公開されるようになった現在を喜んでいいのか？ 気になることばかり……幼稚園百年を迎えた今、幼稚園の姿はどんなふうに変わってゆくだろう？

子どもの自発性はおさえられ、自己充実など思いもよらない

「惰性にかかる日課的生活」で毎日が終つてしまう。

ほんとうに幼稚園は「誰のためにあるのか」問いただしたくな

る昨今である。

まま子扱いは受けていたが、昔の幼稚園にはこんな心配はおきなかつた。

特権階級の子どもしか幼稚園には行けない……ということを悲しんでいた時代から、ようやく大正十五年に幼稚園令が出てよろこび合い、だんだんと小学校教育と肩をならべるようないろいろな制度も考えられた。

戦後は、幼稚園教育は誰もがうけさせねばならぬことと自覚をもつ親たちが多くなってきて、世の中の人たちみんなから注目の一となり、学者の先生方も揃つて幼児教育とり組んでくださつた。そして、二十年前に故人となられた倉橋先生の保育理念がようやくまとまに考えられて、いろいろと思い出される時、子どもたちの幼稚園生活は、それぞれの人たちのもつ保育理念のあまさからこんなにゆれ動いてしまつたことを悲しく思う。

マスコミと幼稚園教育

情報化時代、マスコミの力は幼稚園教育をゆがめている。

毎年春秋にはきまつてテレビで報ぜられる「幼稚園選びのための母親の啓蒙？」とくにNHKの番組には母親たちが目を見はつ

て見入る。忘れもしない今から五、六年前ごろから「七十年代わ
れらの世界」にまで幼児教育が取りあげられてうれしいことでは
あつたが……結果的には大変なマイナスだった。

それをうけてか？ その後の週刊誌、婦人雑誌には幼稚園のこ
とが取りあげられ、「幼稚園の先生にはまかせておけない」「二歳
ではおそすぎる」など、など、数多くの記事は、母親たちの関心
のまととなり、「子どもに早く何かを教えこんだ方がよい」という
結論を与えたものが大部分で、とくにN.H.K.から流された諸外国
にみる幼児教育の姿などは、私たちには大変参考となる面もあつ
たが、母親たちには何を感じさせたであろう。学者の中にもこう

したことに関心をもたせ、「幼児教育は日玉商品化して」商人ま
でが「知恵のつくおもちゃ」に手をのばして大変なブームをよん
でいる現状を見て、幼児教育者の中にはなげいている者が多いと
思う。

短大の養成機関で学び、どんなに「正しい幼児教育理念」を学
んで卒業しても、新任教員のつらさは、目先きのことがどんなに
上手にできるか？ ということで評価され、四十人の子どもをど
うまとめて教えるか？ ということが園長先生の目にとまるよう
に、だんだんと自分のもつ保育理念とははずれたことをしなければ
ならない。こんな「新任一ヵ年間の生活」が気になつて幼稚園か

ら逃げてゆく卒業生のなんと多いことか？

最近とくに甚しい現象は、卒業生の約半数、それも積極性のある優秀な学生が公立の保育所、保育所へと行ってしまう。私立保育所にも、幼稚園にも、「幼児教育にとりくもう」と自覚して奉職する人がだんだんと少なくなつてゆくのをどうしておさえることができるだろうか？

今こそ、マスコミに対し立ち向かう勇気をもてるよう勉強
してほしいものである。

まじめに幼児教育にとり組んでいる新卒者を大事に育ててほ
しいと思う。

そして保護者の啓蒙を。

あちこちにつながる幼稚園教育の悪条件をのりこえて、幼稚園
教育百年目を立派に迎えたいと思う。

戦後、世の中の進歩はすばらしい。そして日本を経済大国にま
でおしつぶたと喜んでいた時に公害に驚き始めた。今、幼稚園の
内外に、公害がおおいからこないように、私たち幼稚園関
係者が手をつけないで守りつけたいものである。

(聖徳学園短期大学)